

満洲古典語とシベ方言における軟口蓋音と口蓋垂音

王 海波

キーワード：満洲語 シベ方言 軟口蓋音 口蓋垂音

要旨

本稿では、口蓋垂音・軟口蓋音の出現制約をふまえて、満洲古典語とシベ方言における軟口蓋音と口蓋垂音の違いが生じた原因について考察した。[1] 「i/y の前以外」の環境にあった口蓋垂音は「i/y の前」の環境に置かれると、軟口蓋音に変化する。逆に「i/y の前」の環境にあった軟口蓋音は「i/y の前以外」の環境に置かれると、口蓋垂音に変化する場合としない場合が共にある。[2] 低母音を持たないが、口蓋垂音を持つ古典語の語幹のシベ方言における同源語では、高母音が低母音に変化するか、口蓋垂音が軟口蓋音に変化する傾向がある。また、低母音の消失による口蓋垂音から軟口蓋音への変化の例もある。[3] 古典語のある語の語幹につく完了接辞の子音の調音点と、シベ方言の対応する同源語語幹につく完了接辞の子音の調音点が違う（口蓋垂音かそれとも軟口蓋音かで異なる）ことがある。これは、完了接辞の子音が口蓋垂音として現れる条件の違いから生じている。また、シベ方言では、語幹における低母音の消失・出現により、完了接辞の子音の調音点が変わる場合がある。[4] シベ方言では、「軟口蓋音+低母音」の出現頻度は「口蓋垂音+低母音」の出現頻度と比べて相対的に低い。そのため、低母音の前にある軟口蓋音は口蓋垂音に変化することが予想される。しかし、そうした例は実際にはほとんどない。

1. はじめに

1.1. 満洲語の概要

満洲語は満洲・ツングース系の言語であり、元々清国（1616-1912）を建てた満洲族の言語である。満洲語の古典語¹（以下「古典語」）は17世紀から18世紀末にかけて清国で使用された満洲語を指す。現在では口語としての満洲語は中国黒龍江省の数地点の数十人位の満洲族と新疆ウイグル自治区のチャプチャルシベ自治県等の約1万7千人のシベ族によって話されている（津曲 1992: 203）。本稿で扱うシベ方言²は、現在チャプチャルシベ自治県

¹ 「文語」と呼ばれることが多いが、文体として口語と対立する意味合いの文語と誤解される可能性があるため、本稿では早田（2010）の「満洲古典語」の言い方に従い、「古典語」と呼ぶことにする。本稿の古典語の形式は主に1795年に刊行された『五体清文鑑』に従う（具体的な資料は田村ほか1966-1968である）。本稿の古典語の表記は Möllendorff (1892) が提案したメレンドルフ表記に従うが、次の3点において異なる表記をする。(i) 早田（2003）に従い、古典語の u と ū を同じ音素と見なし、同じ記号 (u) を用いる。(ii) 早田（2003）に従い、古典語の軟口蓋の阻害音 (k, g, x) と口蓋垂の阻害音 (q, ɢ, ɣ) を異なる音素と見なし、異なる記号を用いる。(iii) モレンドルフ表記の ng を η で表記する。

² シベ方言には次のような音素と異音があると考えられる。/p/ [p^(h)], /b/ [b ~ p^(h)], /m/ [m], /f/ [f], /t/ [t^(h)], /d/ [d ~ t^(h)], /n/ [n ~ ɲ], /s/ [s ~ z ~ ɕ ~ ʑ], /ʃ/ [ʃ ~ ʒ], /c/ [t͡ʃ^(h) ~ t͡ʃ^(h) ~ ɕ ~ ɕ], /j/ [d͡ʒ ~ d͡ʒ ~ t͡ʃ^(h) ~ t͡ʃ^(h) ~ ɕ ~ ɕ], /l/ [l ~ ɭ], /r/ [r ~ ʀ], /k/ [k^(h) ~ q^(h)], /g/ [g ~ k^(h)], /ŋ/ [ŋ ~ ɳ], /x/ [x ~ χ], /q/ [q^(h) ~ χ], /ɢ/ [ɢ], /ɣ/ [χ ~ ʁ], /N/ [̃] (先

で話される満洲語の方言である。

1.2. 本稿の目的

古典語とシベ方言のどちらにも軟口蓋音と口蓋垂音がある（早田 2003 ; Kubo 2008）。しかし、次の表 1 から分かるように、古典語の語における軟口蓋音は、シベ方言の同源語では軟口蓋音として現れる場合（次表の場合 1）と口蓋垂音として現れる場合（次表の場合 2）が共にある。また、古典語の語における口蓋垂音は、シベ方言の同源語では軟口蓋音として現れる場合（次表の場合 3）と口蓋垂音として現れる場合（次表の場合 4）が共にある。

表 1：古典語とシベ方言における軟口蓋音と口蓋垂音の対応

	シベ方言では軟口蓋音	シベ方言では口蓋垂音
古典語では軟口蓋音	場合 1 古典語：xexe シベ方言：xexe [xix] 意味＝「女；妻」	場合 2 古典語：malaxi シベ方言：myalɣe [mʲarɣ] 意味＝「野良猫」
古典語では口蓋垂音	場合 3 古典語：gai-mbi シベ方言：gya-mi [gʲiam] ~ [gʲiem] 意味＝「とる-未完了接辞」	場合 4 古典語：ɣaɣa シベ方言：ɣaɣe [ɣaɣ] 意味＝「男」

上表の場合 2 と場合 3 では、古典語とシベ方言の同源語において調音点の不一致（軟口蓋音かそれとも口蓋垂音かの違い）が見られる。この違いは音変化によると考えられるが、どのような要素が関連しているかという問題がある。本稿では、この問題について扱³。

満洲語では、口蓋垂音・軟口蓋音の出現する環境が音素配列論的な制約を受ける可能性がある。口蓋垂音が出現環境の制約を受ける場合に現れにくくなり、代わりに軟口蓋音が現れやすくなる。また、軟口蓋音が出現環境の制約を受ける場合に現れにくくなり、代わりに口蓋垂音が現れやすくなる。そこで本論では、口蓋垂音・軟口蓋音の出現環境の制約をふまえて、それによる両者の変化について考察する。

1.3. 軟口蓋音と口蓋垂音の表記

早田（2003）によれば、古典語の軟口蓋音（k, g, x）と口蓋垂音（q, g, ɣ）が異なる音素と見なせる。そのため、本稿では早田（2003）に倣って古典語の軟口蓋音と口蓋垂音の表記を

行する母音を鼻母音にする) ~ n ~ m ~ ŋ ~ N ~ ŋ], /y/ [j], /w/ [v ~ w ~ v ~ w ~ f], /i/ [i], /u/ [u ~ y], /e/ [ɜ ~ ɣ ~ u ~ i], /a/ [a ~ ɛ], /o/ [ɔ ~ ø ~ œ]。

³ 前述したように、満洲語の現代方言には、シベ方言のほかに黒竜江省の方言もある。しかし本稿では、古典語と黒竜江省の方言の間における軟口蓋音・口蓋垂音の違いについては扱わない。別の機会に割愛することにする。

区別する。また、シベ方言においても軟口蓋音 (k, g, x) と口蓋垂音 (q, c, ɣ) が異なる音素である。しかし、音素表記 (具体的にどの記号を用いて音素を表記するか) はシベ方言の先行研究によって異なる場合がある。久保ほか (2011)、Kubo (2008)、Jin (1993)、李&仲謙 (1986) では、軟口蓋音に対しては k / g / x を用い、口蓋垂音に対しては q / c / ɣ を用いている。一方、山本 (1969) では、軟口蓋音には k / g / x、口蓋垂音には q / c / h を用いている。また、李ほか (1984) では、軟口蓋音には k / g / h、口蓋垂音には k / c / h を用いている (口蓋垂音の k と h はそれぞれ k と h の右下に descender がつく記号である)。本稿におけるシベ方言の軟口蓋音と口蓋垂音の表記は久保ほか (2011) に倣うが、先行研究を引用する際には、元の表記で引用する。

2. 制約 1

2.1. 制約 1 の内容

古典語とシベ方言のどちらにも q, c, ɣ という 3 つの口蓋垂音と i, u, e, a, o という 5 つの母音がある。しかし、全ての母音の直前に全ての口蓋垂音が現れることができるわけではない。古典語とシベ方言における「口蓋垂音+母音」の組み合わせの可能性をまとめると、次の 2 つの表のようになる。表にある「—」の記号は、該当する例が無いことを表す。

表 2：古典語における「口蓋垂音+母音」の可能性

子音 母音	q		ɣ		g	
i	qi	—	ɣi	—	gi	—
u	qu	aqu 「ない」	ɣu	ɣula- 「読む」	gu	gulmaɣun 「兎」
e	qe	—	ɣe	—	ge	—
a	qa	qa- 「塞ぐ」	ɣa	ɣaɣa 「男」	ga	gaɣa 「鳥」
o	qo	qomso 「少ない」	ɣo	ɣolto- 「騙す」	go	golmin 「長い」

表 3：シベ方言における「口蓋垂音+母音」の可能性

子音 母音	q		ɣ		g	
i	qi	—	ɣi	—	gi	—
u	qu	aqu 「ない」	ɣu	ɣula- 「読む」	gu	gulmaɣuN 「兎」
e	qe	jaqe 「物；奴」	ɣe	ɣaɣe 「男」	ge	—
a	qa	qa- 「塞ぐ」	ɣa	ɣaɣe 「男」	ga	gaɣe 「鳥」
o	qo	qomso 「少ない」	ɣo	ɣoltu- 「騙す」	go	golmiN 「長い」

上の2つの表から分かるように、古典語では「口蓋垂音+i/e」、シベ方言では「口蓋垂音+i」と *ge* の例はない。この分布から、少なくとも「iの前には口蓋垂音が来ない」という制約が両変種にあるということが分かる。満洲語の子音の中では口蓋垂音の調音点が最も奥寄りであるが、母音の中ではiの調音点が最も前寄りである。「口蓋垂音+i」の例が存在しないのは、口蓋垂音と母音iの調音点が離れていることに関係する可能性がある。また、両変種ともに口蓋垂音の後にyが来る例（音声的には、当該口蓋垂音の硬口蓋化の例）はない。すなわち、両変種ともに「i/yの前には口蓋垂音が来ない」という音素配列論的な制約がある。この制約を制約1と呼ぶことにする。

2.2. 制約1による変化

制約1による変化を次のような2つの場合に分けることができると考えられる。

場合1：制約1を受けない環境（=i/yの前以外）から、受ける環境（=i/yの前）に変化することで、口蓋垂音が軟口蓋音に変化する場合。

場合2：制約1を受ける環境（=i/yの前）から、受けない環境（=i/yの前以外）に変化することで、軟口蓋音が口蓋垂音に変化する場合。

2.2.1. 場合1

古典語の *gai* 「とる」における口蓋垂音 *g* は *a* の前にある。すなわち、「i/yの前以外」の環境にある。この環境に口蓋垂音が現れることが可能である。一方、この語のシベ方言における同源語は *gya-* であり、当該子音の出現環境は「i/yの前以外」の環境から「i/yの前」の環境に変化している。この環境の変化により、当該子音は制約1を受けるようになり、口蓋垂音として現れることができなくなる。したがって、口蓋垂音から軟口蓋音への変化が見られる。例えば、未完了接辞 *-mi* がつく場合、*gya-mi* [*gʲam*] ~ [*gʲem*] のような発音である。

2.2.2. 場合2

古典語の *malaxi* 「野良猫」における3つ目の子音 *x* は *i* の前にある。制約1により、この環境には口蓋垂音が現れることができない。一方、この語のシベ方言における同源語は *myalʒe* [*mʲarʒ*] であり、当該子音の出現環境は「i/yの前」から「i/yの前以外」に変化している。この環境の変化により、当該子音は制約1を受けなくなり、口蓋垂音として現れることが可能になる。したがって、軟口蓋音から口蓋垂音への変化が見られる。

同じような例は、古典語の *tarbaxi* 「かわうそ」のシベ方言における同源語 *tyarwaqe* [*tʰer'vaqʰ*] にも見られる。古典語の *tarbaxi* における4つ目の子音 *x* は *i* の前にある。制約1により、この環境には口蓋垂音が現れることができない。一方、この語のシベ方言における同源語 *tyarwaqe* [*tʰer'vaqʰ*] の当該子音の出現環境は「i/yの前」から「i/yの前以外」に変化している。この環境の変化により、当該子音は制約1を受けなくなり、口蓋垂音として現れることが可能になる。したがって、軟口蓋音から口蓋垂音への変化が見られる。

ただし、「i/y の前に口蓋垂音が来ない」という制約は、「i/y の前以外に口蓋垂音が必ず来る」ということを意味しない。すなわち、「i/y の前」という環境の制約が解除されても、当該環境にある軟口蓋音は必ずしも口蓋垂音に変化するとは限らない。上述したような変化する例もあれば、次のような変化しない例もある。

例えば、古典語の *nyaki* 「膿」における *k* は *i* の前にある。制約 1 により、この環境には口蓋垂音が現れることができない。一方、この語のシベ方言における同源語は *yaNke* [*yan^hk^h*] であり、当該子音の出現環境は「i/y の前」から「i/y の前以外」に変化している。この環境の変化により、当該子音は制約 1 を受けなくなり、口蓋垂音として現れることが可能になる。しかし、この例においては軟口蓋音は口蓋垂音にはならない。

同じような例は、古典語の *sargiya* 「股」のシベ方言における同源語 *syarxe* [*ɕærx*] にも見られる。古典語の *sargiya* における *g* は「i/y の前」の環境にある。制約 1 により、この環境には口蓋垂音が現れることができない。一方、この語のシベ方言における同源語は *syarxe* [*ɕærx*] であり、当該子音の出現環境は「i/y の前」から「i/y の前以外」に変化している。この環境の変化により、当該子音は制約 1 を受けなくなり、口蓋垂音として現れることが可能になる。しかし、この例においても軟口蓋音は口蓋垂音にはならない。

また、古典語の *dorgi* 「中」のシベ方言における同源語 *dyorxu* [*d^hœrx^w*] ~ *dyorxe* [*d^hœrx*] もこの場合の例である。この例においても、古典語において「i/y の直前」にあった軟口蓋音はシベ方言で「i/y の前以外」に位置することになる。そのため当該子音は制約 1 を受けなくなり、口蓋垂音として現れることが可能になる。しかし実際には軟口蓋音は口蓋垂音にはならない。ところで、古典語の *dorgi* のシベ方言の同源語は、筆者の調査で得られたデータと先行研究で挙がっているデータでは形式が異なる。表にまとめると、次のようになる。

表 4：古典語の *dorgi* 「中」のシベ方言における同源語

通し番号と出典	発音	当該子音が i/y の前にあるか	当該子音の調音点	
			軟口蓋音	口蓋垂音
(1) 山本 (1969: 126)	<i>diorixi</i> [<i>d^hœrj^hj^h</i>]	+	+	
(2) 李ほか (1984: 35)	<i>dorhi</i>	+	+	
(3) 李&仲謙 (1986: 56)	<i>dœrxi</i>	+	+	
(4) Jin (1993: 2)	<i>dœrx^h</i>	-		+
(5) Jin (1993: 2)	<i>dœrx^h4</i>	-	+	
(6) 久保ほか (2011: 131)	<i>dyorxu</i>	-	+	
(7) 筆者の調査	<i>dyorxu</i> [<i>d^hœrx^w</i>]	-	+	
(8) 筆者の調査	<i>dyorxe</i> [<i>d^hœrx</i>]	-	+	

注：表にある「当該子音」とは古典語の *dorgi* の *g* に対応する子音である。

⁴ Jin (1993) はシベ方言の会話集である。2 ページには *dœrx^h* の形式（下から 9 行目）と *dœrx* の形式（下から 4 行目）のどちらもある。

シベ方言の上表の(1)(2)(3)の形式にある当該子音の環境は、i/y の前である。制約 1 によりこの環境には口蓋垂音が現れることができない。したがって、(1)(2)(3)の場合、当該子音は軟口蓋音である。一方、上表の(4)(5)(6)(7)(8)の場合、当該子音の置かれる環境は「i/y の前」から「i/y の前」以外に変化した。この環境の変化により、当該子音は制約 1 を受けなくなり、口蓋垂音として現れることが可能になる。しかし、ほとんどの記述では当該軟口蓋音は口蓋垂音には変化していない。筆者が調査した話者の中には当該子音を口蓋垂音のように発音する者は 1 人もいない。

3. 制約 2

3.1. 制約 2 の内容

前述したように、古典語とシベ方言のどちらにも i, u, e, a, o という 5 つの母音音素がある。そのうち、a, o が低母音であり、i, u, e が高母音である（早田 2003 ; Kubo 2008）。古典語の語幹⁵では、低母音がなくても口蓋垂音が現れるものが多くある。例えば、χusun 「力」や urχu- 「(馬が) 驚く」のような例がある。一方、シベ方言の語幹では、低母音がなければ口蓋垂音が現れにくい傾向にある。両変種のこの差異は両変種の低母音を持たない同源語を比較するとよく分かる。次では具体例をみよう。

3.2. 制約 2 による変化

3.2.1. 低母音がない場合の変化

[1] 例 1

古典語の χusun 「力」には低母音がないが、口蓋垂音 (χ) がある（語頭の子音）。一方、シベ方言における同源語は、少なくとも筆者が調査した話者はみな xusuN [xu'zū:] ~ [xu'sū:] のように発音する（当該子音は軟口蓋音である）。先行研究では、早田（1985: 25）も [xusun] のような形式を記述している（当該子音は同じように軟口蓋音である）。一方、久保ほか（2011: 131）と李ほか（1984: 10）はそれぞれ χusuN [χʊzū:] と husun [χuzū] のような形式を記述している（当該子音は口蓋垂音である）。なお、山本（1969: 7）の記述では、husun [χʊsʊn] 「腕力、力」と xusuN 「努力」という 2 つの形式がある（当該子音はそれぞれ口蓋垂音と軟口蓋音である）が、意味が異なる。表にまとめると、次のようになる。

⁵ 本稿における「語幹」は「同じ語彙素の全語形に共通する部分」という意味で使われている。すなわち、語幹は派生接辞を含み得るが、屈折接辞を含まない。接語も無論含まない。よって、シベ方言における je=qu 「食べない」（食べる=否定接語）のような場合は、低母音がなく口蓋垂音があるが、当該口蓋垂音は語幹内ではなく接語にあるため、本節で扱う制約 2 の対象ではない。

表 5：古典語の *χusun* 「力」のシベ方言における同源語

通し番号と出典	発音	語頭子音の調音点	
		軟口蓋音	口蓋垂音
(1) 山本 (1969: 7)	h usun [χʊsʊn]		+
(2) 山本 (1969: 7)	x usun	+	
(3) 李ほか (1984: 10)	h usun [χuzū]		+
(4) 早田 (1985: 25)	[x usun]	+	
(5) 久保ほか (2011: 131)	χ usuN [χʊzū:]		+
(6) 筆者の調査	x usuN [xu'zū:]	+	

[2] 例 2

古典語の *urχu-* 「(馬が) 驚く」には低母音がないが、口蓋垂音 (*χ*) がある (2 つ目の子音)。一方、シベ方言における同源語は、少なくとも筆者が調査した話者はみな *urxu-* のように発音する (当該子音は軟口蓋音である)。しかし、先行研究では、当該子音の調音点は口蓋垂音である。表にまとめると、次のようになる。次の表では、未完了接辞 *-mi* がついた形で挙げる。

表 6：古典語の *urχu-mbi* 「(馬が) 驚く-未完了接辞」のシベ方言における同源語

通し番号と出典	発音	2 つ目の子音の調音点	
		軟口蓋音	口蓋垂音
(1) 山本 (1969: 111)	ʔ uru h umə [ʔurwʊm]		+
(2) 李ほか (1984: 258)	ur h u m		+
(3) 筆者の調査	urxu -mi [ʔur'χum]	+	

[3] 例 3

古典語の *šuruqu* 「轆轤」には低母音がないが、口蓋垂音 (*q*) がある (3 つ目の子音)。一方、シベ方言における同源語は「糸巻き」の意味であり、筆者が調査した話者は *surku* [sur^wk^ʰ] のように発音する (当該子音は軟口蓋音である)。先行研究では、山本 (1969: 11) と李ほか (1984: 236) はそれぞれ *surəkə* [surk] ~ *suruku* [surkw] と *surku* のような形式を記述している (当該子音は同じように軟口蓋音である)。

表 7：古典語の *suruqu* 「轆轤」のシベ方言における同源語

通し番号と出典	発音	3つ目の子音の調音点	
		軟口蓋音	口蓋垂音
(1) 山本 (1969: 11)	<i>surəkə</i> [surk]	+	
(1) 山本 (1969: 11)	<i>suruku</i> [surwkw]	+	
(2) 李ほか (1984: 236)	<i>surku</i>	+	
(3) 筆者の調査	<i>surku</i> [sur ^w k ^{wh}]	+	

[4] 例 4

古典語の *cinuɣuN* 「朱砂」には低母音がないが、口蓋垂音 (χ) がある (3つ目の子音)。一方、シベ方言における同源語は、筆者が調査した話者は *cinxuN* [tɕ^hin' yũ:] のように発音する (当該子音は軟口蓋音である)。しかし、先行研究では、李ほか (1984: 218) は *qinuhun* のような形式を記述している (当該子音は口蓋垂音である)。

表 8：古典語の *cinuɣuN* 「朱砂」のシベ方言における同源語

通し番号と出典	発音	3つ目の子音の調音点	
		軟口蓋音	口蓋垂音
(1) 李ほか (1984: 218)	<i>qinuhun</i>		+
(2) 筆者の調査	<i>cinxuN</i> [tɕ ^h in' yũ:]	+	

上述した例 1 と例 2 と例 4 では、異なる研究者によるシベ方言の異なる記述は、(記述自体がみな正確なら) 個人差を反映している可能性がある。どの例においても古典語の当該子音は口蓋垂音であるが、シベ方言の同源語における当該子音は口蓋垂音と軟口蓋音のどちらの記述もある。すなわち、当該子音が口蓋垂音から軟口蓋音に変化した形で発音する話者と、当該子音が口蓋垂音から軟口蓋音に変化していない形で発音する話者の 2 種類の話者がいる。したがって、この口蓋垂音から軟口蓋音への変化は進行中である可能性が高い。

3.2.2. 低母音がある場合の変化

すぐ上の 3.2.1. では、低母音を持たない語幹における口蓋垂音から軟口蓋音への変化の例を挙げた。逆に低母音を持つ語幹における軟口蓋音から口蓋垂音への変化の例もある。例えば、古典語の *waiku* 「歪んだ」には軟口蓋音 (*k*) があるが、シベ方言における同源語は *wyaqe* [vjaq^h] ~ *wyaqu* [vjaq^{wh}] であり、当該子音は口蓋垂音 (*q*) である⁶。

⁶ なお、2.2.2. で述べた *malaxi* > *myalɣe* と *tarbaxi* > *tyarwaqe* の変化もこの場合の例であるが、この2つの例では、制約 1 の解除という要素も関わる。

3.2.3. 低母音が消える場合の変化

3.2.1. の例では、古典語の語幹に低母音がないため、シベ方言の同源語における口蓋垂音から軟口蓋音への変化の傾向が見られる。これらの例では両変種の同源語のどちらにも低母音がない。一方、古典語の語幹に低母音があるが、シベ方言の同源語でその低母音が他の母音に変化した場合がある。例えば、次のような例がある。

[1] 例 1

古典語の **uqsura**「支族」には低母音も口蓋垂音もある。一方、シベ方言の同源語は「民族」の意味であり、筆者の調査では **uksuru** [ʔuk'sur^w]~**uksure** [ʔuk'sur] のような形式である（当該子音は軟口蓋音 **k** である）。先行研究における記述でも同じように当該子音は軟口蓋音である。すなわち、古典語の **uqsura** における低母音 **a** はシベ方言の同源語では **u** か **e** に変化しているため、低母音がなくなっている。それに伴い、口蓋垂音の **q** は軟口蓋音の **k** に変化した。表にまとめると、次のようになる。

表 9：古典語の **uqsura**「支族」のシベ方言における同源語（シベ方言では意味は「民族」）

通し番号と出典	発音	1つ目の子音の調音点	
		軟口蓋音	口蓋垂音
(1) 山本 (1969: 42)	ʔuksuri [ʔukwsurj]	+	
(2) 李ほか (1984: 254)	uhsur	+	
(3) 李&仲謙 (1986: 12)	uxsur	+	
(4) 李&仲謙 (1986: 12)	uksur	+	
(5) 李&仲謙 (1986: 150)	uxsurw	+	
(6) 久保ほか (2011: 6)	uksuru [uksurw]	+	
(7) 久保ほか (2011: 139)	uksure	+	
(8) 筆者の調査	uksuru [ʔuk'sur ^w]	+	
(9) 筆者の調査	uksuru [ʔuk'sur]	+	

[2] 例 2

古典語の **saqda**「年老いた」には低母音も口蓋垂音もある。一方、シベ方言における同源語の形式は、研究者によって記述が様々である。表にまとめると、次のようになる。

表 10：古典語の saqda 「年老いた」のシベ方言における同源語

通し番号と出典	発音	母音 a が 消えたか	2 つ目の子音の調音点	
			軟口蓋音	口蓋垂音
(1) 山本 (1969: 37)	saħədə [saħɛd]	-		+
(2) 山本 (1969: 63)	saahədə	-		+
(3) 李ほか (1984: 62)	sehɗ	+	+	
(4) 李&仲謙 (1986: 10)	səxd [səɣtʰ]	+	+	
(5) 李&仲謙 (1986: 10)	saɣd [saɣtʰ]	-		+
(6) 久保ほか (2011: 141, 146)	seɣde [səɣt]	+		+
(7) 久保ほか (2011: 143, 147)	seɣde [sɪɣt]	+		+
(8) 筆者の調査	sexde [sɪxtʰ]	+	+	

研究者によって記述が多様であるが、次の 3 種類にまとめられる。

- (i) 低母音も口蓋垂音も残っている形式。上表の(1)(2)(5)番。本稿表記では saɣde。
- (ii) 低母音が残っていないが、口蓋垂音が残っている形式。上表の(6)(7)番。本稿表記では seɣde。
- (iii) 低母音も口蓋垂音も残っていない形式。上表の(3)(4)(8)番。本稿表記では sexde。

この 3 つの形式の差異から分かるように、低母音 a から e への変化 (= 変化 1) と、口蓋垂音から軟口蓋音への変化 (= 変化 2)、という 2 つの変化があった。この 2 つの変化の順序に関しては、もし変化 2 が変化 1 に先行するなら、「変化 2 が起こっており、変化 1 が起こっていない段階の形式」が残っている可能性があっても、「変化 1 が起こっており、変化 2 が起こっていない段階の形式」が残っている可能性はないことになる。しかし実際には、「変化 1 が起こっており、変化 2 が起こっていない段階の形式」(すなわち、seɣde) は残っている。したがって、変化 2 が変化 1 に先行するのではなく、変化 1 が変化 2 に先行するといえる。すなわち、saɣde > seɣde > sexde のような順序で変化したと考えられる。

低母音 a が e に変化することで、低母音がなくなる。前述したように、シベ方言に制約 2 「低母音がなければ口蓋垂音が現れにくい」という新しい制約が生じつつあるようである。すなわち、この例 (すなわち、saɣde > seɣde > sexde の例) における口蓋垂音から軟口蓋音への変化は、低母音の消失によると考えられる。ただし、(iii) の場合の形式の記録 (上表の(3)(4)(8)番) もあるため、この変化は進行中である可能性がある。

3.2.4. 低母音が出現する場合の変化

前述したように、語幹内における低母音の消失によって口蓋垂音が軟口蓋音に変化した例がある。しかし、逆に語幹内における低母音の出現によって軟口蓋音が口蓋垂音に変化した例はないようである。例えば、古典語の juxe 「氷」、suxe 「斧」、šulxe 「梨」は低母音を持

たないが、シベ方言の同源語 *juxo* [dʒu'ɣo:]⁷「氷」、*suxo* [su'ɣo:]「斧」、*sulxo* [suɾ'ɣo:]「りんご」では2つ目の母音が低母音 *o* に変化した。しかし、この低母音の出現は軟口蓋音から口蓋垂音への変化をもたらしていない⁸。

3.2.5. 制約 2 による低母音の出現

前述したように、古典語では低母音がなくても口蓋垂音が現れる可能性が十分あるが、シベ方言では低母音がなければ口蓋垂音が現れにくい傾向にある。したがって、低母音を持たないが、口蓋垂音を持つような古典語の語幹は、シベ方言の同源語では次のどちらかの変化が起こる傾向にある。

- (i) 高母音から低母音への変化が起こる。
 - (ii) 口蓋垂音から軟口蓋音への変化が起こる。
- (ii) の場合については 3.2.1. 節で考察したが、本節では (i) の場合について扱う。まず、次のような例をみよう。

表 11：制約 2 による 2 種類の変化の例

	番号	古典語	シベ方言	意味
A 組	(1)	χuda	χuda	値段
	(2)	χula-	χula-	読む
	(3)	χulan	χulaN	煙突
	(4)	χulχa	χulχa	泥棒
B 組	(5)	χucin	qociN	井戸
	(6)	χudun	χoduN	速い
C 組	(7)	χusun	xusuN	力

上表の古典語の全ての例には口蓋垂音 *χ* がある。また、A 組の古典語の例には低母音 (a) があるが、B 組と C 組の古典語の例には低母音がない。

A 組の例のシベ方言における同源語では、新しい低母音の出現と口蓋垂音から軟口蓋音への変化のどちらもない。それに対して、B 組の例のシベ方言における同源語では、高母音 (u) から低母音 (o) への変化によって低母音が出現しているため、口蓋垂音 *χ* があっても制約 2 に違反しない。一方、C 組の例のシベ方言における同源語では、低母音が出現してい

⁷ *juwo* [dʒu'vɔ:] のように発音する話者もいる。すなわち、この例では、軟口蓋音が歯唇音に変化している。後舌子音 (軟口蓋音・口蓋垂音) と唇音の間の変化はシベ方言に散発的に起こっているようである。王海波 (2018) の 5.3.10.2. 節を参照されたい。

⁸ 低母音の前における軟口蓋音から口蓋垂音への変化に関しては第 6 章を参照されたい。なお、古典語の *suxe* 「斧」と *su-xe* 「脱ぐ-完了接辞」のシベ方言における同源語はそれぞれ *suxo* と *so-χu* であり、どちらにも低母音 *o* が出現しているが、前者では *x > χ* の変化が起こっておらず、後者では *x > χ* の変化が起こっている。後者における *x > χ* の変化をもたらしたのはシベ方言における「低母音を持つ語幹につく完了接辞の子音は口蓋垂音である」という別の制約による。詳細は第 5 章を参照されたい。

ないが、口蓋垂音が軟口蓋音に変化しているため、制約 2 に違反しない。

B 組には他の例もある。例えば、次のような例がある。

表 12：制約 2 による低母音の出現の例

	番号	古典語	シベ方言	意味
B 組	(1)	buχu	boχu	鹿
	(2)	fulχu	folχu	袋
	(3)	fusiχun	fosχuN ~ fosquN	下
	(4)	guni-	goni-	思う
	(5)	gunin	goniN	意味
	(6)	gusin	gosiN	30
	(7)	iqu-	yoqu-	縮む
	(8)	jucun	joχuN	道
	(9)	julχu	jolχo	手綱
	(10)	nincuχun	yancyχuN	生臭い
	(11)	qutχu-	qoχtu-	混ぜる
	(12)	suqu	soqu	肌
	(13)	ulχu	olχu	葦
	(14)	χu	χo	糊
	(15)	χu-	χo-	編む
	(16)	χucin	qociN	井戸
	(17)	χudun	χoduN	速い
	(18)	χusi-	χosi-	包む
	(19)	χuturi	χuturi ~ χoturi	福

上記の B 組の全ての例において、高母音 (i/u) から低母音 (o) への変化が見られる。このような変化は、A 組のシベ方言における同源語では稀である⁹。したがって、B 組のシベ方言の例における低母音の出現（高母音から低母音への変化）は、制約 2「低母音がなければ口蓋垂音が現れにくい」に関連している可能性が高い。

ただし、制約 2 による変化は進行中のものがある（上表の(19)）。また、制約 2 に違反しても変化が起こらないような例も稀にある。例えば、古典語の **qubuli-**「変わる」のシベ方言における同源語は少なくとも筆者が調査した話者は **quwile-** のように発音する¹⁰。この語

⁹ 例えば、古典語 **faquri**「ズボン」のシベ方言の同源語は **faqare** である。この例にある u>a の変化は制約 2 とは関係なく、散発的な順行同化と考えられる。

¹⁰ 先行研究では、李ほか (1984: 309) は **kuvuli-** (本稿表記では **quwuli-**)、李&仲謙 (1986: 161) は **quvuli-** (本稿表記では **quwuli-**)、山本 (1969: 88) は **qovəli-**, **quvəli-** (本稿表記では **qoweli-**, **quweli-**) のような

幹には、低母音がないが口蓋垂音がある。しかし、このような例外は稀である。前述したように、低母音を持たないが口蓋垂を持つ古典語の語幹のシベ方言における同源語では、他の母音から低母音への変化、または口蓋垂音から軟口蓋音への変化が起こった（または進行中の）例の方が圧倒的に多い。

4. 制約 1 と制約 2 の共同作用による変化

前述したように、制約 1 は「i/y の前」の環境にある口蓋垂音に対する制約である。それに対し、制約 2 は低母音のない語幹にある口蓋垂音に対する制約である。この 2 つの制約の環境は重複する可能性がある。すなわち、低母音がない、かつ「i/y の前」という環境である。例えば、次のような例がある。古典語の *χulxi* 「愚かな」のシベ方言における同源語は、筆者が調査した異なる話者によって *χulxiN* ~ *xulxiN* ~ *xyulyxiN* ~ *xyulxuN* のような形式がある。また、先行研究では、山本 (1969:97) は *hulixiN* [*χoljyin*] (本論表記では *χulyxiN*)、李ほか (1984:60) は *hulhin* (本論表記では *χulxiN*) のような形式を記述している。表にまとめると、次のようになる。

表 13：古典語の *χulxi* 「愚かな」のシベ方言における同源語

通し番号と出典	発音	低母音の有無	語頭子音の後に i/y があるか	語頭子音の調音点	
				軟口蓋音	口蓋垂音
(1) 山本 (1969: 97)	<i>hulixiN</i> [<i>χoljyin</i>]	-	-		+
(2) 李ほか (1984: 60)	<i>hulhin</i>				+
(3) 筆者の調査	<i>χulxiN</i>				+
(4) 筆者の調査	<i>xulxiN</i>			+	
(5) 筆者の調査	<i>xyulyxiN</i>		+	+	
(6) 筆者の調査	<i>xyulxuN</i>			+	

上表から分かるように、どの形式も低母音を持たない。すなわち、どの形式においても語頭子音は制約 2 を受けている。また、一部の形式（上表の(5)(6)番）では、語頭子音の環境は「i/y の前以外」から「i/y の前」に変化した。すなわち、上表の(5)(6)番の語頭子音は制約 1 と制約 2 を同時に受けている。

第 3 章で述べたように、制約 2 による変化は進行中のものがある。この例においても、制約 1 を受けておらず、制約 2 だけを受けている形式（上表の(1)(2)(3)(4)番）では、語頭子音は軟口蓋音と口蓋垂音のどちらの例もある。一方、第 2 章で述べたように、制約 1 は厳格な制約であり、「i/y の前」に置かれた口蓋垂音は義務的に軟口蓋音に変化する。したがって、

形式を記述している。山本が記述した *qovəli-* では 1 音節の母音が低母音 *o* に変化している。しかし、筆者が調査した話者はこの発音に違和感を感じるようである。

制約 1 と制約 2 を同時に受けている形式（上表の(5)(6)番）では、語頭子音は軟口蓋音の例はあるが、口蓋垂音の例はない。

5. 制約 3

5.1. 制約 3 の内容

古典語の完了接辞には *-xe, -ke, -ɣa, -ɣo, -qa, -qo, -ŋke, -ŋqa, -ŋqo* の異形態がある (Möllendorff 1892: 8)。シベ方言の完了接辞には、*-xe, -ke, -xu, -ɣe, -ɣu* の異形態がある。古典語では、語幹に陰性母音 ([*-RTR*] の母音、*e*) がある場合、完了接辞は *-xe, -ke, -ŋke* として現れる。この場合、接辞子音は軟口蓋音がある。また、語幹に陽性母音 ([*+RTR*] の母音、*a, o*¹¹) がある場合、完了接辞は *-ɣa, -ɣo, -qa, -qo, -ŋqa, -ŋqo* として現れる。この場合、接辞子音は口蓋垂音である¹²。さらに、語幹の母音が所謂中性母音 (*i, u*) のみの場合、接辞子音は語幹によって軟口蓋音として現れる場合と口蓋垂音として現れる場合のどちらもある。

一方、シベ方言の完了接辞の子音の調音点は、語幹における低母音 (*a, o*) の有無だけに関係する。語幹に低母音がない場合、完了接辞の子音は軟口蓋音であり、語幹に低母音がある場合、完了接辞の子音は口蓋垂音である (Kubo 2008: 138-139)。

各場合の例を次表に挙げた。

表 14：古典語とシベ方言の完了接辞

語幹の母音		完了接辞の子音の調音点			
		古典語		シベ方言	
a, o がある場合		口蓋垂	例：sa-ɣa 「知る」	口蓋垂	例：sa-ɣe 「知る」
			例：o-ɣo ¹³ 「なる」		例：o-ɣe ¹⁴ 「なる」
a, o が ない場合	e がある場合	軟口蓋	例：gene-xe 「行く」	軟口蓋	例：gene-xe 「行く」
	e がない場合 =i, u のみの場合	軟口蓋	例：bi-xe 「いる」 例：bu-xe 「与える」	軟口蓋	例：bi-xe 「いる」 例：bu-xe 「与える」
		口蓋垂	例：giru-ɣa 「恥じる」 例：isi-qa 「足りる」		cf. gire-xe 「恥じる」 cf. ise-xe 「足りる」 ¹⁵

注：スペースの関係で例の右にある日本語訳に語幹の訳だけをあげており、「完了接辞」を省略している。

¹¹ *ʊ* (メレンドルフ記号の *ū* に当たる) も陽性母音と見なされる (Ard 1984: 60; 季永海ほか 1986: 86)。但し本論では、早田 (2003) に従い、*ʊ* を *u* の異音として見なしている。

¹² 古典語の *-ŋqa, -ŋqo* における *ŋ* も口蓋垂音であった可能性が高い (5.3. を参照)。

¹³ *o-ɣa* 「従った」の形式もあるが、接辞子音の調音点は同じく口蓋垂である。

¹⁴ シベ方言では語幹末の母音が円唇母音の場合、完了接辞の母音は *e* の他に *u* もあり得るが、スペースの関係で省略した。

¹⁵ シベ方言の *ise-* と *gire-* は *e* があるため、語幹中の母音が *i, u* のみの場合の例ではないが、左側にある古典語の *isi-* と *giru-* の同源語と完了接辞を比較するために (「cf.」をつけて) ここに入れた。

上の表では語幹を次のような3つの場合に分けている。

- (i) 語幹に a, o がある場合
- (ii) 語幹に a, o がないが、e がある場合
- (iii) 語幹の母音が i, u のみの場合

シベ方言では、(i) の語幹の場合にだけ完了接辞に口蓋垂音が現れる。一方、古典語では、(iii) の語幹の場合にも完了接辞に口蓋垂音が現れることが可能である。すなわち、古典語とシベ方言の完了接辞にある口蓋垂音の出現条件に対する制約が異なる¹⁶。

この節で見た制約3を要約すると次のようになる：語幹の母音が i, u のみの場合、古典語の完了接辞には口蓋垂音が現れることが可能であるが、シベ方言の完了接辞には口蓋垂音が現れることができない。

5.2. 制約3による変化

5.2.1. 両変種の制約の違いによる変化

前述したように、古典語とシベ方言の完了接辞にある口蓋垂音の出現条件が異なる。具体的には、語幹の母音が i, u のみの場合、古典語の完了接辞には口蓋垂音が現れることが可能であるが、シベ方言の完了接辞には口蓋垂音が現れることができない。この場合、シベ方言では次のどちらかの変化が起こる傾向にある（この点については3.2.5. の場合と類似する）。

- (a) 語幹における高母音から低母音への変化が起こる。（次表のA組）
- (b) 接辞における口蓋垂音から軟口蓋音への変化が起こる。（次表のB組）

¹⁶ なぜこのような違いがあるかを説明するには、満洲語の母音調和の通時的变化についてみる必要がある。古典語では、完了接辞の異形態を決める要素は、語幹の母音の [±RTR] の性質である。所謂中性母音の u は古典語より早い段階では [+RTR] の母音と [-RTR] の母音という2つの母音であったが後に1つの母音に融合したと考えられる。所謂中性母音の i も同じようである。しかし、融合した後の中性母音は少なくとも古典語の時点では [±RTR] の性質をある程度保っており、その性質は当該中性母音を持つ語幹に後続する完了接辞の調音点に現れると考えられる。一方、シベ方言の段階では、i, u の [±RTR] の性質は完全に失われている。満洲語における母音調和の変化に関する概説は拙論（王海波 2020）を参照されたい。

表 15：古典語とシベ方言の完了接辞における子音の調音点が異なる例

	番号	古典語	シベ方言
A 組	(1)	cuni- χ a 「思う」	goni- χ e 「思う」
	(2)	iqu- χ a 「ちぢむ」	yoqu- χ e 「ちぢむ」
	(3)	muri- χ a 「ねじる」	myore- χ e 「ねじる」
	(4)	qut χ u- χ a 「混ぜる」	qo χ tu- χ e 「混ぜる」
	(5)	χ usi- χ a 「包む」	χ osi- χ e 「包む」
	(6)	χ u- χ a 「編む」	χ o- χ e 「編む」
	(7)	ili- χ a 「立ち上がる；起き	yila- χ e 「立ち上がる；止まる」
B 組	(8)	上がる；止まる」	yi-xe 「起き上がる」
	(9)	giru- χ a 「恥じる」	gire-xe 「恥じる」
	(10)	iru- χ a 「沈む」	yuru-xe 「沈む」
	(11)	isi-qa 「足りる」	ise-xe 「足りる」
	(12)	niru- χ a 「描く」	yuru-xe ¹⁷ 「描く」
	(13)	siri- χ a 「しぼる」	sire-xe 「しぼる」

注：スペースの関係で例の右にある日本語訳に語幹の訳だけをあげており、「完了接辞」を省略している。

上表の(7)(8)の古典語の ili- χ a のシベ方言における同源語には yila- χ e と yi-xe がある¹⁸。古典語の ili- χ a は語幹に低母音がないが、完了接辞に口蓋垂音がある。したがって制約 2 により、シベ方言の同源語では上記の (a) 語幹における高母音から低母音への変化と (b) 接辞における口蓋垂音から軟口蓋音への変化のどちらかが起こる必要がある。1 つ目の同源語 yila- χ e では語幹に (a) の変化が起こっており、2 つ目の同源語 yi-xe では接辞に (b) の変化が起こっている。また、(1)-(6) においては、語幹に (a) の変化が起こっている¹⁹。(9)-(13) には、接辞に (b) の変化が起こっている。

5.2.2. 語幹の低母音が消える場合の変化

前述したように、シベ方言では低母音 (a, o) を持つ語幹にだけ、口蓋垂音を含む完了接辞が後続可能である。5.1. と 5.1.1. の例では、古典語とシベ方言の同源語の語幹のどちらにも低母音がある、またはどちらにも低母音がない。一方、古典語の語幹に低母音があるが、シベ方言の同源語の語幹でその低母音が高い母音に変化した例もある。

例えば、古典語の動詞語幹 isina- 「着く」には a があるため、完了接辞が後続する場合、接辞が - χ a のような形式をとり、接辞の子音は口蓋垂音 (χ) である。一方、シベ方言の同

¹⁷ 筆者が調査した話者は全員、この語幹につく完了接辞の子音を軟口蓋音で発音する。一方、比較的早期の調査に基づく研究である山本 (1969: 64) には yurəhə の記述があり、当該子音は口蓋垂音である。

¹⁸ もう 1 つの同源語 yili-xe 「立ち上がる-完了接辞」もあるが、使用頻度が相対的に低いようである。

¹⁹ (1)(2)(4)(5)(6)では語幹の高母音が低母音に変化したため、完了接辞にある口蓋垂音も、語幹にある口蓋垂音も、軟口蓋音に変化していない (表 12 を参照)。

源語は *isine-* であり、語幹にある低母音 *a* が *e* に変化しており、語幹にはもう低母音がない。語幹には低母音がないため、完了接辞が後続する場合、接辞は *-xe* の形式をとり²⁰、接辞の子音は軟口蓋音 (*x*) である。この例では語幹の低母音が消えたことで、接辞の子音が口蓋垂音から軟口蓋音に変化した。

5.2.3. 語幹に低母音が出現する場合の変化

すぐ上の 5.2.2. で述べたように、古典語の語幹に低母音があるが、シベ方言の同源語の語幹でその低母音が他の母音に変化した場合がある。それに対して、古典語の語幹に低母音がないが、シベ方言の同源語の語幹で他の母音が低母音に変化した場合もある。

例えば、古典語の動詞語幹 *su-*「脱ぐ；解く」に完了接辞が後続する場合、その完了接辞が *-xe* の形式をとり、接辞の子音は軟口蓋音 (*x*) である。一方、シベ方言同源語は *so-*「脱ぐ」であり、語幹にある母音 *u* が低母音 *o* に変化しており、語幹に低母音が出現している。語幹に低母音があるため、完了接辞が後続する場合、接辞が *-xu ~ -xe* の形式をとり、接辞の子音は口蓋垂音 (*χ*) である。この例では語幹の低母音が出現したことで、接辞の子音が軟口蓋音から口蓋垂音に変化した。

5.3. 口蓋垂音の前における η について

5.1. で言及したように、古典語の完了接辞には *-xe, -ke, -xa, -xo, -qa, -qo, -ηke, -ηqa, -ηqo* の異形態がある。*-ηke, -ηqa, -ηqo* における *k* と *q* の分布条件は他の異形態と同様であるが、*k* の前にある η と *q* の前にある η は満洲文字では綴りが同様である。しかし、綴りが同様であることは音韻論的に区別されないことを示唆している可能性があるが、音声的に調音点が同様である保証はないと考えられる。確かな根拠はないが、同化の影響で当該鼻音は後続する *k, q* と調音点が同様（それぞれ軟口蓋と口蓋垂）であったと推測される²¹。

シベ方言では、鼻音を持つ完了接辞の異形態はないが、類似する状況が他の場合に存在する。例えば、シベ方言には *N* という音素があり、その調音点は後続する子音の調音点に同化される (Kubo 2008: 131 ; 久保ほか 2011: 6-7)。しかし、山本 (1969) が記述した音声表記では、*N* (音素 *N* は山本の音素表記では *N* である) が口蓋垂音の前に現れる全ての例において、その音声の実現が軟口蓋音である。具体的には、*qanqamə [qanqəm]* (p18), *šianqən [ʃanqən]* (p22), *ʼunqamə [ʔunqam]* (p35), *yanqən [janqən]* (p41), *sonqələmə [sənqələm] ~ sonqulumə*

²⁰ 筆者が調査した話者は全員 *isine-xe* のように発音し、*isine-χe* のように発音する話者は 1 人もいない。一方、比較的早期の調査に基づく研究である山本 (1969) の記述では、*isine-xe* の形式と *isine-χe* の形式のどちらも例がある。例えば、前者の例に *ʼišinaxə* (山本 1969: 133)、後者の例に *ʼišinəhəʼi* (山本 1969: 62) と、*ʼišinəhəʼiʼee* (山本 1969: 33, 131) と、*ʼišinəhəvə* (山本 1969: 111) がある。その時代の記述に当該子音の軟口蓋音の記述と口蓋垂音の記述のどちらもあるため、その時点ではまだ変化が進行中であったと考えられる。

²¹ 古典語では口蓋垂音の前における η は口蓋垂音 [N] であった可能性が高いが、シベ方言の同源語ではその η の後にある口蓋垂音が脱落する場合、当該の口蓋垂音の η*[N] が軟口蓋音に変化する。例えば、古典語の *aŋca* *[aŋca]「口」のシベ方言における同源語は *aŋe* [aŋ] である。

[səŋqulum] (p49), hoŋqə [χəŋq] (p54), juŋ ɕiamə [dzuŋ ɕæm] (p62), tɔŋqəmə [təŋqəm] ~ tɔŋqumə [təŋqum] (p79), maŋqən [maŋqən] (p102), maŋqənəmə [maŋqənəm] (p102), boŋqənəvəm [boŋqənəvəm] (p114), fīaŋqələn [fīaŋqələn] (p127) のような例である。しかし、筆者が調査した話者の発音では口蓋垂音の前の N は口蓋垂音として現れている。例えば、qaŋqə-mi [qʰaŋqʰim] 「喉が渴く-未完了接辞」などの例がある²²。

ただ、軟口蓋と口蓋垂の鼻音の問題は、軟口蓋と口蓋垂の破裂音・摩擦音の問題とは異なるレベルの問題である。古典語とシベ方言のどちらにおいても、軟口蓋の破裂音・摩擦音と口蓋垂の破裂音・摩擦音は異なる音素である。したがって、軟口蓋と口蓋垂の破裂音・摩擦音の問題は音素のレベルの問題である。一方、軟口蓋の鼻音と口蓋垂の鼻音は同じ音素の異音と考えられる。したがって、軟口蓋と口蓋垂の鼻音の問題は音声のレベルの問題である。

6. 制約 4

6.1. -xaqu > -χaqu の例

満洲語では、完了接辞の後に否定接語 =aqu が後続することで完了相の否定を表す。例えば、シベ方言には次のような例がある。次の例にある wa- と gene- はそれぞれ「殺す」と「行く」の意味の動詞語幹である。その後につく -χe/-xe は完了接辞である。

(1) wa-χe + =aqu > wa-χaqu

(2) gene-xe + =aqu > gene-xaqu [gin'ɕaqʰ] (> gene-χaqu [gin'ɕaqʰh])

上の例から分かるように、完了接辞の後に =aqu がつく場合、完了接辞と =aqu の 1 音節目が融合する。完了接辞の子音が軟口蓋音の場合、すなわち(2)の場合、-xaqu のような形式である。また、ごく一部の話者は -xaqu の代わりに -χaqu のように発音する。筆者が調査した大半の話者は -χaqu のような発音に違和感を感じるようである。久保ほか (2011) もこの変化に言及しており、変化後の -χaqu の形式を「革新的な形式」と指摘している。

6.2. dexame' > dexame' の例²³

前述した xa > χa の変化には次のような例もある。シベ方言には dexame' 「母の姉妹の夫」のような語がある。筆者が調査した話者のうち、ごく一部の話者は dexame' の代わりに dexame' のように発音するが、ほとんどの話者は dexame' の発音に違和感を感じるようである。

²² なお、シベ方言の音素 ŋ は普通軟口蓋音 [ŋ] として現れるが、音声的に口蓋垂音と隣接する場合、その ŋ が軟口蓋音として現れるか、それとも口蓋垂音として現れるかについては、研究者によって記述が異なる。例えば、soŋu-χu=yi 「泣く-完了接辞=モダリティ接語」の例では、ŋ と χ の間の u が母音として実現されない（この現象に関する音韻規則は Kubo 2008: 136 を参照されたい）ため、ŋ と χ が音声的に隣接するようになる。この場合、久保ほか (2011: 11, 17) は soŋu-Xei [soŋχu] のように記述している。この記述では、口蓋垂音の前における ŋ は口蓋垂音ではなく軟口蓋音として現れている。一方、筆者が調査した話者はこの語を [səŋχu] のように発音する。すなわち、当該鼻音は口蓋垂音として現れている。

²³ シベ方言のアポストロフィの記号は久保ほか (2011) に倣ったアクセント記号である。

る。なお、先行研究にはどちらの形式の記述もある。まとめると、次のようになる。

表 16：シベ方言の「母の姉妹の夫」を表す語の形式

通し番号と出典	発音	2つ目の子音の調音点	
		軟口蓋音	口蓋垂音
(1) 山本 (1969: 38)	dexamee [dʒɤmɛ:]	+	
(2) 李ほか (1984: 124)	dehame		+
(3) 李&仲謙 (1986: 150)	dəχamə		+
(4) 筆者の調査	ほとんどの話者：dexame'	+	
(5) 筆者の調査	ごく一部の話者：dexame'		+

6.3. 制約 4 の内容

xa > χa のような変化が起こったのは、χa が xa より調音しやすいことが関係していると考えられる。すなわち、「口蓋垂音と低母音の相性」は「軟口蓋音と低母音の相性」より良いということを反映している。これに基づいて、「低母音の前に軟口蓋音が現れにくい」という内容の制約 4 を設定することはできなくもないが、実際、この制約はこれまで見た 3 つの制約より遥かに弱い。次の 2 点から制約 4 の弱さが分かる。

(i) 「軟口蓋音+低母音」の例が多い

次表は筆者の調査データに基づいてシベ方言の語根における「口蓋垂音+低母音」と「軟口蓋音+低母音」の出現頻度をまとめたものである。この表から分かるように、「軟口蓋音+低母音」の出現頻度は「口蓋垂音+低母音」には敵わないが、それでも一定の割合を占めている。特に口蓋垂音と比べて ga, ko は 4 割前後、ka は 4 分の 1 ほどの割合を占めている。

表 17：シベ方言の語根における「口蓋垂音+低母音」と「軟口蓋音+低母音」の出現頻度

qa	52	75.4%	ga	32	59.3%	χa	132	99.2%
ka	17	24.6%	ga	22	40.7%	xa	1	0.8%
合計	69	100%	合計	54	100%	合計	133	100%
qo	10	62.5%	go	31	86.1%	χo	49	89.1%
ko	6	37.5%	go	5	13.9%	xo	6	10.9%
合計	16	100%	合計	36	100%	合計	55	100%

(ii) xa > χa の変化に違和感を感じる話者が多い

上の表から分かるように、「軟口蓋音+低母音」の出現頻度が最も低いのは xa である。前述した dexame' という 1 例のみである（上の表は語根にある例であるため、-xaqu の場合が含まれていない）。したがって、「軟口蓋音と低母音の相性」のうち、「x と a の相性」が最

も悪いと考えられる。しかし、この相性が最も悪い x と a の組み合わせの xa でさえ、他の発音への変化 ($xa > \chi a$) がほとんど認められない²⁴。前述したように、筆者が調査したほとんどの話者は *deχame'* のような発音に違和感を感じるようである。

要するに、「軟口蓋音+低母音」の出現頻度が相対的に低いにも関わらず、低母音の前における軟口蓋音から口蓋垂音への変化の例はほとんどない²⁵。すなわち、制約 4「低母音の前に軟口蓋音が現れにくい」はかなり弱い制約である。

7. その他の例

古典語とシベ方言の軟口蓋音と口蓋垂音の間の変化は、前述した制約 1～制約 4 によるものがほとんどであるが、その他に次のような例もある。*cuwa* という形式をふくむ古典語の語幹は、シベ方言における同源語では、語幹によってその口蓋垂音 g が変化しない語幹と、軟口蓋音 g に変化した語幹のどちらもある。前者の場合 (g が変化しない場合) には次のような例がある。古典語 *cuwa* 「別の；別の人」と *cuwaliya-* 「変わる」のシベ方言における同源語はそれぞれ *cwa* と *gwali-* である。後者の場合 (g が g に変化した場合) には次のような例がある。古典語の *cuwacixiyala-* 「驚く」と *cuwalgiya* 「瓜爾佳 (苗字)」のシベ方言における同源語はそれぞれ *gwacyx(y)ale-* ~ *gwacyk(y)ale-* ~ *gwasyx(y)ale-* ~ *gwasyk(y)ale-* と *gwaryg(y)a* ~ *gwalyg(y)a* である。この 2 つの例は口蓋垂音から軟口蓋音への変化の例である。

8. おわりに

本稿では、口蓋垂音の出現に対する 3 つの制約 (制約 1・制約 2・制約 3) と軟口蓋音の出現に対する 1 つの制約 (制約 4) に基づいて、古典語とシベ方言における軟口蓋音と口蓋垂音の違いについて考察した。そして、次のような変化を明らかにした。

- [1] 「 i/y の前以外」の環境にあった口蓋垂音は「 i/y の前」の環境に置かれると、軟口蓋音に変化する。逆に「 i/y の前」の環境にあった軟口蓋音は「 i/y の前以外」の環境に置かれると、口蓋垂音に変化する場合としない場合が共にある。
- [2] 低母音を持たないが、口蓋垂音を持つ古典語の語幹のシベ方言における同源語では、高母音が低母音に変化するか、口蓋垂音が軟口蓋音に変化する傾向がある。また、低母音の消失による口蓋垂音から軟口蓋音への変化の例もある。
- [3] 古典語とシベ方言の間における完了接辞の子音が口蓋垂音として現れる条件の違いにより、同源語の語幹につく完了接辞の子音の調音点 (口蓋垂音か軟口蓋音か) の違いがあり得る。また、シベ方言では、語幹における低母音の消失・出現により、完了接辞の子音の調

²⁴ 3.2.4. では、シベ方言の xo が χo に変化しないという現象に言及した。本節の内容から分かるように、シベ方言では「軟口蓋音と低母音」のうちの最も相性が悪い x と a の組み合わせの xa でさえ、 χa への変化が困難である。 xo の出現頻度が xa より若干多く、 x と o の相性は x と a より良いと思われるため、 $xo > \chi o$ の変化は $xa > \chi a$ の変化以上に困難であると考えられる。

²⁵ なお、古典語とシベ方言を比較すると分かるように、古典語からシベ方言まで「軟口蓋音+低母音」の例は減少するどころか、むしろはやや増加してきているようである。古典語の固有語には「軟口蓋音+低母音」の例はないが、シベ方言の固有語には例が少ないが存在する (例えばと 6.1. と 6.2. にある例)。

音点に変化する場合がある。

[4] シベ方言では、「軟口蓋音+低母音」の出現頻度が相対的に低いにも関わらず、低母音の前にある軟口蓋音が口蓋垂音に変化する例はほとんどない。

なお、*cuwa* という形式をふくむ古典語の語幹は、シベ方言における同源語では、語幹によってその口蓋垂音 *g* が変化しない語幹と、軟口蓋音 *g* に変化した語幹のどちらもある。

上記の [1][2][3] のどれも口蓋垂音の出現に対する制約による変化であり、[4] だけが軟口蓋音に対する制約による変化である。軟口蓋音より口蓋垂音の方が受ける制約が強く、制約の数も多い。また、実際に口蓋垂音から軟口蓋音への変化の例も軟口蓋音から口蓋垂音への変化の例より圧倒的に多い。このことから、口蓋垂音が軟口蓋音より有標であることが示唆される。

参考文献

- Ard, Josh. (1984) Vowel harmony in Manchu: a critical overview. *Journal of Linguistics*. 20: 57-80.
- 早田輝洋 (1985) 「錫伯語調査ノートより」『九大言語学研究室報告』6: 23-35.
- 早田輝洋 (1995) 「満洲語文語における『行く』と『来る』—『行く』と『来る』の使い分けの一例」『大東文化大学紀要』33: 179-197.
- 早田輝洋 (2003) 「満洲語の母音体系」『九州大学言語学論集』23: 1-10.
- 早田輝洋 (2010) 「満洲語と満洲文字」『語学教育フォーラム』24: 1-35.
- 季永海・劉憲景・屈六生 (1986) 『満語語法』北京：民族出版社.
- Jin Ning. (1993) *Sibe-English Conversations*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Kubo, Tomoyuki. (2008) A sketch of Sibe phonology. *Gogaku Kenkyuu Fooramu*. 16: 127-142.
- 久保智之・児倉徳和・庄声 (2011) 『2011 年度言語研修シベ語テキスト1 シベ語の基礎』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 李樹蘭・仲謙・王慶豊 (1984) 『錫伯語口語研究』北京：民族出版社.
- 李樹蘭・仲謙 (1986) 『錫伯語』北京：民族出版社.
- Möllendorff, P. G. von. (1892) *A Manchu Grammar with Analysed Texts*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.
- 田村実造・今西春秋・佐藤長 (1966-1968) 『五体清文鑑訳解』京都：京都大学文学部内陸アジア研究所.
- 津曲敏郎 (1992) 「満州語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典第4巻』pp. 203-205. 東京：三省堂.
- 王海波 (2018) 「満洲・シベ語現代方言音韻論」博士論文, 東京大学人文社会系研究科.
- 王海波 (2020) 「満洲語現代方言における母音調和」『北方言語研究』10: 135-156.
- 山本謙吾 (1969) 『満洲語口語基礎語彙集』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

The Velars and the Uvulars in the Classic Manchu and Sibe

WANG, Haibo
haibohaipo@163.com

Keywords: Manchu, Sibe dialect, velar, uvular

Abstract

The present paper aims at finding the causes of the differences between the velars and the uvulars in the Classic Manchu and the Sibe dialect of Manchu based on the constraints on the two consonants. [1] A uvular changes into a velar when it is moved into the environment before *i/y*, whereas a velar may or may not change into a uvular when it is moved away from the environment before *i/y*. [2] If a stem containing a uvular in the Classic Manchu does not have a low vowel, a high vowel will probably change into a low vowel or the uvular will possibly change into a velar in its Sibe cognate. Moreover, the disappearance of a low vowel in a Sibe stem may also cause the uvular to change into a velar. [3] The place of articulation of the consonant (i.e. uvular or velar) in the perfective suffix attached to the stem in Classic Manchu is likely to be different from the place of articulation of the consonant in the perfective suffix attached to the stem in its Sibe cognate, and the difference is caused by the different principles in the two varieties specifying the consonant in the suffix. Moreover, the disappearance or the emergence of a low vowel in the stem may also cause the place of the articulation of the consonant in the suffix to change. [4] The frequency of “velar + low vowel” is lower than “uvular + low vowel” in Sibe, and it may be predicted that the velar before a low vowel changes into the uvular, however, there are scarcely any examples of this type of change.

(おう・かいは 嶺南師範学院)